

「クリブヒストリー」 part 3

—— 図書館の過去・現在・未来 ——

加 藤 恭 輔

第 4 章 図書館電算化時代（1989 ～ 1994 年）

本学図書館の電算化の本格スタートは、元号が昭和から平成に変わった平成元（1989）年である。世界の図書館ではすでに昭和 55（1980）年代前半から電算化に移行する趨勢にあった。この流れに対して、本学の図書館はどう対応して、電算化を実現していったのか。実施にいたる苦労や奮闘ぶりを振り返ってみよう。

第 1 節 図書館の電算化スタート

平成元年（1989 年）当時、本学の図書館は名古屋学舎（当時）の図書館本館と豊田学舎（当時）の豊田図書館の 2 館体制だった。蔵書冊数は、製本された雑誌を含め、すでに総計 50 万冊を超えようとしていた。

本の貸し出しを希望する学生や教員は、カードボックスの前に立ち、その中にあるカード目録に目を通して、書名や著者名、シリーズ名を手掛かりに、本の配架場所を探し出さなければならない。その本が閉架書庫にある場合は、カード目録に書かれている請求記号や本のタイトル、著者名を閲覧請求カードに書き写し、閲覧カウンターにいる図書館職員に提出する。職員はその都度、閉架書庫へ走って行って本を取り出し、利用者に手渡す——という手順だ。



平成元（1989）年に開催された図書館コンピュータ始動式

現代のように、コンピュータに『地球温暖化』『安全保障』といった「キーワード」となる単語さえ打ち込めば、関連書籍がズラリと出てくる便利な時代ではない。キーワードの単語さえ分かっている

ば、正確な書名や著者名が不明でもお目当ての本を探し出せる、というわけにはいかないのである。

図書館を利用する人にとっては、不便だったろう。しかし、本を管理する図書館職員は、それ以上に大変だった。カードボックスは、和書と洋書に分け、それぞれ請求番号順、書名順、著者名順の3種類を設置した。請求番号順のボックスは、カードの請求番号と著者記号順、和書の書名順のボックスには書名やシリーズ名、著者名順のボックスには、著者名や編著者名をヘボン式ローマ字順に並べた。洋書はアルファベット順に並べた。そのため同じカードを数枚作成して、それぞれのカードボックスにその順番に従って並べなければならなかった。

当時、図書館には年間1万冊以上の新しい蔵書が加えられていた。このため、職員は数万枚の目録カードを作成し、カードボックスに入れていく作業に追われた。

さらに、本学図書館には致命的な欠陥があった。本館では、豊田図書館にどんな蔵書があるかを探し出すことが出来たが、豊田図書館で本館にある蔵書を探すことは不可能だったのである。なにしろ、蔵書冊数50万冊超である。豊田図書館では、本館所蔵の目録カードをカードボッ

目録カード

①請求番号、②が書名、③が著者名など、④が出版に関する事項、⑤が形態に関する事項、⑥がシリーズ名、⑦が原書名などの注記事項、⑧が検索語句、⑨が登録番号、⑩が所在場所

和 書	洋 書
<p>① 3 6 1.5 L. 5 8</p> <p>② 社会的島嶼の解決 グループ・ダイナミックス論文集 ③ クルト・レヴィン〔著〕 末永俊郎訳 ④ 東京 東京創元社 1977 ⑤ xx. 3 0 0 p. 1 9 cm ⑥ (現代社会科学叢書) ⑦ 原書名: Resolving social conflicts</p> <p>⑧ OPEN</p> <p>⑨ 17 0 7 9 0</p> <p>⑩ 1. Shakaiteki kattô no kaiketsu 2. Gendai shakai kagaku sôsho al. Lewin, Kurt a2. Suenaga. Teikir</p>	<p>① 331.84 Sc 93 ② MAIN</p> <p>③ Seron, Francis. ④ Cost, use, and value: the evaluation of performance, structure, and prices across time, space, and economic systems. / Francis Seron; with a special annex contributed by Albert E. Steenge. -- ⑤ Oxford: Clarendon Press, 1985. ⑥ xii, 182 p.: illus.; 23 cm. Includes bibliographical references and index. ⑦ 0523569 LC: B5000259 ISBN: 0158284713</p> <p>HOLDINGS: MAIN</p> <p>1. Comparative economics. 2. Prices. 3. Value. I. Title.</p> <p>88 CULA 0021 86JAN20 50833630</p>

この場合では、和書は、請求記号①で1枚、書名②⑤⑥で3枚、著者⑧のa1とa2で2枚の計6枚
洋書は、請求記号①で1枚、書名②で1枚、著者③で1枚の計3枚

クスに並べ、貸出希望者に対応するには、スペース的にも人的にも無理があった。

「図書館を電算化する以外にない」。蔵書の書名や著者名、つまりカード目録に書き込まれていた情報をすべてデータベース化し、併せて図書館利用者の情報もデータベース化する。この2つがそろって初めて図書館の電子化が完成し、利便性が高まることになる。

関東や関西地区ではすでに多くの大学で、電算化がスタートしていた。東海地区の大学でも数校が電算化に着手していた。本学図書館は、明らかに“後発”だった。50万冊超という、あまりにも多い蔵書冊数がネックだった。

一口にデータベース化といっても、様々な手法がある。どんな形式を採用するか、いつカード目録を廃止するか、利用者のデータベースはどう構築するかなど解決すべき問題は山積していた。

「何から手を付けたらよいのか分からない。しかし、この事業をやり遂げなければ、本学図書館を変革させることはできない」。職員全員が一致して、困難に立ち向かっていった。

第2節 データベースの構築

資料のデータベース化には、MARC^(注1)（機械可読目録）と呼ばれるものを利用する必要があった。一口に MARC と言っても、データの精度に相違があった。当然、和書と洋書ではその MARC も違っていた。

実を言うと、本学図書館では、英語、フランス語、ドイツ語などの洋書資料に関しては、図書館の電算化スタートの5年ほど前（1984年頃）から、UTLAS（アトラス）^(注2)と呼ばれるカナダのトロント大学が構築していたデータベースを利用して、本学洋書のデータベースを作成保存する試みを始めていた。ただ、本学図書館に保存用のコンピュータがあったわけではない。電話回線を利用して、中京大学が所蔵する資料として、トロント大学にあるホストコンピュータのデータベースに、情報を追加保存する契約を結んでいたに過ぎない。従って、本学図書館の利用者がそのデータベースを直接利用できる状況ではなく、利用者は和書と同様、カードボックスから洋書所蔵資料を探す以外になかった。

和書のデータに関しては、国立国会図書館が数年前からデータベース化を進め、そのデータを JAPAN-MARC^(注3)として多くの図書館に提供することが始まっていた。本学図書館でも、電算化をスタートさせ

注1：MARC（マーク）

MAchine-Readable Cataloging の略。機械可読目録のこと。書誌情報や関連情報を機械が読める形式で表現して通信するための規格。定義されている書誌データフォーマットは、1960年代にアメリカ議会図書館の Henriette Avram が開発した。今日のほとんどの図書目録の基礎となっている。

注2：UTLAS（アトラス）

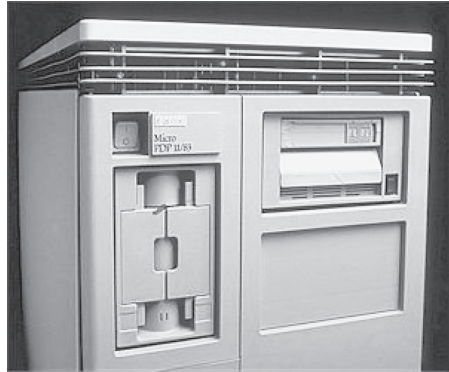
University of Toronto Library Automated System の略。カナダのトロント大学図書館で構築された図書資料データベースのこと。

注3：JAPAN-MARC（ジャパンマーク）

国立国会図書館が全国書誌データ頒布用として開発した MARC で昭和 56（1981）年に頒布サービスが始まった。

るに当たって、その JAPAN-MARC を利用することを決定した。電算化には欠くことの出来ない貴重なデータベースだった。

こうして、和書については JAPAN-MARC を、洋書については UTLAS を利用して、電算化をすすめることを決定し、その後本学図書館に設置



PDP-11/84

されたホストコンピュータ（PDP-11/84^{（注4）}）にデータベースを構築していった。当時、専任職員が本館に 17 名、豊田図書館には 9 名がいた。それを補助する非常勤職員が本館に 7 名。豊田に 4 名。総勢 37 名が作業に従事した。

和書と洋書、そして雑誌担当が、それぞれの中で、今までカード目録で管理されていた資料のデータベース化を担当する遡及入力班と、新規に購入する資料をデータベース化する新規入力班とに分けてデータベース構築に向き合った。遡及入力については、雑誌も含めて約 50 万冊、新規購入資料については、同じく年間約 1 万冊の資料のデータベースをがむしゃらに構築した。

和書は、CD-ROM で購入した JAPAN-MARC をホストコンピュータに入れて、和書担当者がそれを検索し、ヒットしたものからデータをダウ

注 4：PDP-11/84（ピーディーピー・イレブン 84）

本学図書館の電算化スタート時のホストコンピュータ。アメリカのデジタル・イクイップメント・コーポレーションのコンピュータ（digital 社はこれをコンピュータとは呼ばなかった。その理由は、当時、コンピュータは高価で、そのイメージを払拭するためであった。）。PDP は当時のミニコンピュータの典型でアドレス空間は 64K に制限されていた。

ンロードしていった。和書の遡及が約 30 万冊あったが、当然そのすべてがヒットするわけではない。ヒットしない資料についてはオリジナルでデータを作成しなければならなかった。書名、著書名、出版社、出版年、ページ数、本の大きさ、内容注記などを、決められた入力規則に従って、データ入力端末機で入力した。

洋書も同様だ。UTLAS 保存データについては、そのデータを本学図書館が購入したホストコンピュータにコンバートすればそれでデータができると考えていたが、和書と洋書を同一レベルでデータベース構築するには、若干ではあるが手を入れる必要があった。とはいえ、遡及対象の洋書だけでも約 5 万冊を入力しなければならず、多くの時間と人数を要した。もちろん、UTLAS データにヒットしなければ、オリジナルでデータを作成しなければならなかった。

オリジナルデータの作成には、和書も洋書も慣れが必要だった。MARC に合わせたデータ作成がとても厄介なものだった。和書は NCR（日本目録規則）^(注 5)、洋書は AACR2（英米目録規則 第 2 版）に合わせたデータ作成をしなければならず、その規則に従ってデータを作成しなければ、コンピュータによる目録表記や検索に支障が出てしまうのである。

ちなみに、ちょっと専門的になるが、NCR と AACR2 の標準入力フォームを示してみよう。以下が NCR の標準書誌事項と AACR2 の第 2 レベル（標準）書誌事項のルールを示したものになる。どちらもスペースや区切り記号（[]、=、:、;、/、—、など）が非常に重要になり、このルールに従ってデータ記述（入力）をしなければ（一つでも違ってい

注 5：NCR（日本目録規則）と AACR2（英米目録規則 第 2 版）

NCR は日本の図書館で、AACR2 はアメリカの図書館で図書や雑誌等の資料を蔵書目録に記入するときの手順と規則を定めたもの。特に AACR2 は世界中で参考とされている。

<p>本タイトル〔資料種別〕；タイトル関連情報〔責任表示、版表示〕 特定の版にのみ関係する責任表示、資料（または刊行方式）の特性に関する事項、出版地または頒布地等；出版者または頒布者等、出版年または頒布年等、特定資料種別と資料の数量；その他の形態的細目；大きさ；付属資料、（本シリーズ名、シリーズに関係する責任表示、シリーズのISSN；シリーズ番号、下位シリーズの書誌的事項、）注記、標準番号</p>	<p>本タイトル〔一般資料表示〕= 並列タイトル：タイトル関連情報 / 最初の責任表示；2 番目以降の各責任表示、版表示 / 版に関連する最初の責任表示、資料（または出版物の種類）特性細目、最初の出版地など；最初の出版者など、出版年など、資料の数量；その他の形態的細目；大きさ、（シリーズの本タイトル / シリーズに関連する責任表示、シリーズのISSN；シリーズ番号、サブシリーズのタイトル、サブシリーズのISSN；サブシリーズ番号）、注記、標準番号。</p>
---	--

NCR の標準書誌事項

AACR2 の第 2 レベル（標準）書誌事項

れば）機械は可読せず、データベースの構築もできず、当然だが検索もできないことになってしまう。「慣れればこの程度のルールはすぐに頭に入る」と思いがちだが、慣れるまでに相当の時間がかかった。（今のデータもすべてこのルールに従っている）

データベース構築に当たっては、別にもう一つの大きな問題が持ち上がっていた。図書館に所蔵されている図書には必ず登録番号（資料 ID ナンバー）が貼ってある。しかし、それまで本館と豊田図書館を、それぞれ独立した図書館とみなして運営してきたため、2 つの図書館で図書の登録番号が重複してしまっているという事実が判明してしまった。

同じ登録番号の本の存在は、電算化上あってはならないのである。登録番号はデータを個別化する唯一のものなのである。図書がどちらの図書館のものなのか、判断ができなくなってしまうのだ。

図書館の資料をデータベース化するということは、本館と豊田図書館を「1 つの図書館」とみなすということである。当然のことではあるが、蔵書数の多い本館の登録番号はそのままとし、蔵書数の少なかった豊田図書館の資料には、すべて新たな登録番号を付与することになった。豊田図書館の職員には少し手間になったが、データベース構築の効率化と利用者への混乱を避けることができた。

一方、利用者のデータベースは、どのように構築していったのだろうか。現代のように、入学と同時に全学生に ID 番号の付いた学生証が付与されていたわけでない。

図書館で本を借りていく学生に、名前と学部、学年などをカードに記

入してもらって、その都度、そのデータをコンピュータに入力して、利用者データを構築する以外に手がなかった。すべてがゼロからの積み上げだったのである。

第3節 現図書館の基礎の確立

電算化がスタートした平成元年（1989年）、本学は6学部11学科、大学院が4研究科6専攻を擁する総合大学に発展していた。本学創設から32年が過ぎ、昭和44（1969）年の本館建設からも約20年の歳月が経っていた。

本館建設時には約75,000冊だったが、図書館電算化スタート時の平成元（1989）年には、本館の蔵書数だけでも約40万冊あり、昭和46（1971）年に体育学部が豊田学舎に移転すると同時に設置された豊田図書館の蔵書数も加えると、図書館全体では約53万冊となっていた。

毎年約1万冊の図書資料と5,000冊の製本雑誌が増えていき、これまでに所蔵していた資料の遡及入力とを合わせたデータベース構築には、想像を絶するほどの多くの時間と人数を必要とした。

平成7（1995）年、名古屋キャンパスセンタービルに本学3館目の図書館となるライブラリー・サービス・センター（LSC）がオープンし

た。その時の電算化率は30%を超えていた。総蔵書数は、約60万冊に増えており、電算化をスタートして6年間で約20万冊近く、1年間に約3万冊のペースで新規購入資料のデータ化と遡及



図書館コンピュータ始動式のときの図書館事務室

入力をしたことになる。

西暦が 1999 年から 2000 年に変わるとき、コンピュータに大きな障害が発生する可能性があるかもしれないという噂に振り回された。いわゆる「コンピュータの 2000 年問題」である。コンピュータの日付が 2000 年に対応していない、平成 12（2000）年 1 月 1 日午前 0 時に支障が出るかもしれない、などと言った問題が世界中で巻き起こった。大いに心配したが、実際には杞憂に終わった。

いずれにせよ、本学図書館の電算化は、図書館そのものの姿を大きく変貌させ、現在の図書館の礎を築いたと言える。当時の電算化では処理の出来なかった、キリル文字（ロシア語）の処理、ハングルや中国語の処理も、現在では可能となっている。これらの言語は当時取り残され、電算化の進む中、依然としてカード目録を作成していた。そのためカードボックスの撤去には、電算化から 20 年近くの歳月を要した。本館と豊田図書館からカードボックスが撤去されたのは、平成 17（2005）年頃のことである。

その間の平成 3（1991）年には、「開かれた図書館」として学外者にも図書館を解放したことから、図書館の利用者数は増加の一途をたどっていた。平成 10（1998）年には、法学部のある校地Ⅱに「法学文献センター」（LLC）が設立され、現在の 4 館体制となり、蔵書数も 100 万冊を超えた。今では 4 館のどこからでもコンピュータで蔵書検索ができ、貸し出しサービスを受けることができるようになった。

これまで本学の図書館職員の多大な労力により構築されたデータベースが、現在の図書館サービスの礎となったのは、まぎれもない事実である。

第 5 章 豊田図書館新館誕生秘話（1980 ～ 1988 年）

さて、またまた時代を少し遡ってみよう。

豊田校舎（現・豊田キャンパス）に図書館の分館が開設されたのは、電算化の始まる 18 年前、昭和 46（1971）年のことである。体育学部が名古屋校舎（現・名古屋キャンパス）から豊田校舎に移転したのに伴い、体育学部の図書館としてスタートを切った。正式名称は、「中京大学附属図書館豊田分館」。教室等の一部を活用し、主に体育関係の図書が所蔵された。3 年後の昭和 49（1974）年、豊田校舎本館（本部棟）が完成すると、その南側 1・2 階に豊田分館も移転。そして、15 年後の昭和 63（1988）年、現在の豊田図書館がオープンすることとなる。その新館誕生に向けての秘話を紹介しよう。

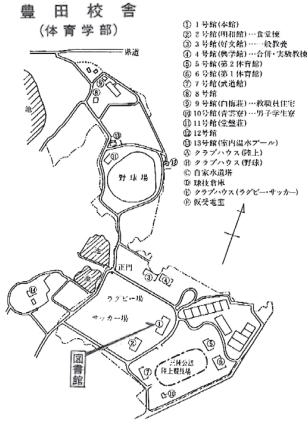
第 1 節 豊田分館回想

昭和 55（1980）年頃の豊田分館の姿を再現してみると——。場所は豊田校舎本館の南側。1 階部分に事務室と閉架書庫、2 階部分には、開架閲覧室（44 席）と一般閲覧室（112 席）、それに閉架書庫があった。体育学関係と教育学関係を中心に約 70,000 冊の資料（教育学と体育学で約 3 割）を収蔵していた。

開架閲覧室には、固定式の書架が設置されておらず、代わりに簡易シェルビー（組み立て式の書架）を並べ、約 5,000 冊の図書を配架していた。利用者が自由に手に取って閲覧できる資料は蔵書の約 7% でしかなかった。

なぜ、7% なのか。開架閲覧室には、多くの資料を配架できない構造上の理由があった。1 階の閉架書庫は図書館としての建物強度が考慮されたが、2 階部分の開架閲覧室と一般閲覧室は通常の建物強度で建築されたため、図書の重さに床の強度が耐えられなかったのである。

閉架書庫は、1・2 階部分を 3 層式にした構造になっていた。1 層部分（1 階）には、当時最新式の電動式集密書架が設置されていた。2 階部分に当たる閉架書庫の 2 層目は和書（約 46,000 冊）、3 層目には洋書（約 17,000 冊）を収蔵していた。



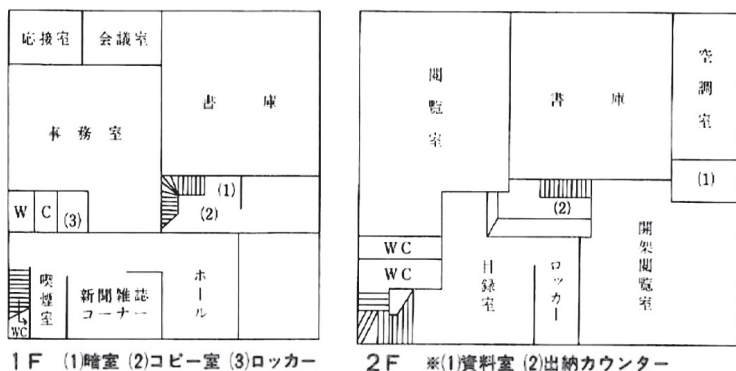
1 階の電動式集密書架には、製本雑誌（約 7,000 冊）と約 450 種（和雑誌 310、洋雑誌 140）のカレント雑誌（継続購読雑誌）を収蔵していた。その他に、カセットテープやマイクロフィルム、マイクロフィッシュ、さらには 16mm フィルムや 8mm フィルムなども収蔵していたが、専用の所蔵場所が造られなかったため、1 階事務室内にあった会議室内に専用架を設置し、収蔵していた。

当時の豊田校舎全体はどうだったのか。豊田校舎の鳥瞰図と航空写真を見比べながら、少し説明しておこう。豊田校舎は、体育学部のみが設置されていた関係で、広い敷地（現在のほぼ 6 割程度の広さ）に建物が点在していた。

航空写真を見ると、写真手前にはトラックのあるグラウンドが写っている。その右横の大きな建物が、第 1 体育館（大体育館、鳥瞰図の⑥）である。

その隣には第 2 体育館（小体育館、鳥瞰図の⑤）、そして写真中央には本館（鳥瞰図の①）が見える。本館の左側には食堂棟（学生食堂、鳥瞰図の②）、その左手前には武道館（鳥瞰図の⑦）があった。また、グラウンドトラックの左下には男子学生寮（青雲館、鳥瞰図の⑩）があった。

分館平面案内図



航空写真中央の本部棟の上に見える 2 つの建物は、教室棟である。

その上にあるグラウンドは野球場で、横には「常盤荘」と呼ばれる学生寮があった。航空写真では見えないが、常盤荘のすぐ裏には室内温水プールもあった。第 1 体育館の裏にある建物はクラブハウスや球技倉庫などだった。航空写真の中央にある本館の見える側の 1・2 階に豊田分館があった。(鳥瞰図の①)

当時の豊田校舎のイメージを思い浮かべながら読んでいただきたい。上の図は、豊田分館の簡単な案内図である。1 階には事務室、書庫、会議室、応接室の他、分館出入口から続くホール、自由に利用できた新聞雑誌コーナー、さらに今の時代では考えられないが、喫煙室もあった。2 階には目録室、ロッカー室、一般閲覧室、開架閲覧室、そして閲覧カウンターがあり、その奥には書庫があった。当時、体育学部のみであった豊田校舎は、この状況においては十分な施設であり、多くの学生がこの環境の中で、学習にスポーツに励んでいた。

豊田分館は、体育学部の学生にとっては格好の休憩場所でもあった。もちろん図書館を利用する学生の多くは勉強をしていたが、夏はクーラー、冬は暖房が入っており、アスリートたちが辛い練習で疲れた体を

いやす場所としても最高だった。

第2節 豊田分館移設新築計画

昭和 61（1986）年、豊田校舎に社会学部が増設された。豊田分館の蔵書冊数はこの時、約 10 万冊に達しており、本館 1・2 階書庫では既に収蔵能力を超えていた。

社会学部増設にあたり、当時の文部省（現文部科学省）への学部設置認可申請手続きには、図書館の蔵書数も一定の冊数が必要とされた。このため、豊田分館では、社会学部設置に向け、その 2 年ほど前から、社会学部関連の資料と一般教養資料の充実を図った。特に社会科学関係資料の収蔵冊数は、昭和 55（1980）年時点の約 15,000 冊から、社会学部が設置された昭和 61（1986）年には約 35,000 冊と、約 20,000 冊増加していた。加えて一般教養図書などの購入も進み、この 6 年間で約 30,000 冊増加していた。

収蔵能力を超えた豊田分館をどうするか。応急措置として、書庫内に簡易シェルビーを設置し、増加した図書を配架して凌いでいたが、限界だった。

水面下では、社会学部発足に歩調を合わせて、豊田分館を増築する計画が立案されていた。本館の 1・2 階部分を改装し、図書館書庫を北側のり面に増築するという案である。

あらまは、① 40 万冊収蔵の書庫を増築、既存書庫と合わせて 50 万冊可能とする②開架閲覧室とレファレンス室を拡大して 5 万冊以上の規模とする③閲覧座席数を 400 席以上にする④ AV 室を設ける（20 席以上のブースを備える）⑤ブラウジングルームを拡大する⑥カフェテリアを併設して、閉館後も学生が集まるようにする——などであった。

これと並行して、事務局及び体育学部棟の新築も計画されていたが、総合的に考えると、豊田分館の増改築には多大な費用がかかるうえ、あまり便利なものにならないということもあり、図書館を移転し、その後

を改築して事務局を置くという方法がよいという案が有力となった。これは、当時の梅村清明学長の英断で、現在位置に独立棟として豊田分館を新築することとなった。

昭和 61（1986）年 10 月 7 日には、豊田分館新築計画の基本設計要領ができた。

第 3 節 豊田図書館の誕生

基本設計要領の作成にあたっては、当時の豊田分館の職員の意見が大きく取り入れられた。これは、当時の分館課長やこの新築に関わった図書館職員に、「従来の豊田分館のイメージを大きく払拭して、できるだけ利用しやすい図書館を利用者目線で作ろう」という意気込みがあったからである。こうした経緯の下に新築された豊田図書館は、誕生から 30 年を経とうとしている現在でも見劣りしない。

第一に、何と言っても図書館独立棟であること。建物前の広いスペース、風除室のある入口を入れば、くつろぎのエントランスホールに新聞雑誌を読めるブラウジングスペースがある。そこから図書館入口を入ると、左手にカウンター。その反対側には広々とした 1 階開架スペース（当時はこのスペースに目録カードボックスが置いてあった）が見渡せる。

カウンター前には 2 階への広い螺旋階段。それを上がるとガラス窓で囲まれ、図書館の外の風景も見渡すことのできる 2 階閲覧室が広がる。さらに閲覧室の奥には静粛学習室と一般閲覧室。表側にはグループで学習のできるグ



完成した豊田図書館

ループ学習室が2部屋、さらに、ガラスとドアで仕切られた2階ラウンジがある。ここは、1階エントランスホールと吹き抜けで空間を共有する素晴らしい空間となっている。カウンターの奥は、事務室スペースとなっていて、事務室、厨房、トイレ、応接室（館長室）、会議室、資料室、司書講師研究室が備わっている。カウンターの後ろには書庫に繋がる階段がある。事務室からは、エレベーターで書庫に降りるのだが、ここにも当時の基本設計要領通り、職員の要望に応えた配慮が見てとれる。図書整理を終えて書庫に配架に行く場合には、事務室から直接エレベーターに乗って各書庫に行くことができるようにエレベーターの位置を決定した。このことは業務効率のアップと疲労軽減に役立っている。

第4節 舞台裏

延べ床面積3,300㎡（1,000坪）。総工費7億6千万円で設計図の作成など複数業者に依頼、競合の結果、三井建設が施工することに。昭和62（1987）年4月14日、球技体育館とともに地鎮祭が行われた。豊田図書館が誕生するまでには、設計図は11回描きかえられ、何度も会議を重ねた。管理運営上の問題や利用者の便宜上の問題点、技術上の問題や安全面での問題、美観の問題など、合意点を見出すための多くの困難があった。豊田分館職員からも「21世紀を先取りした斬新さがほしい」「ニューメディアへの配慮をしてほしい」「座席に余裕がほしい」などの要望が出された。その要望が90%近く認められた形で建築は順調に進み、昭和63（1988）年4月に開館した。

豊田分館職員は、工事が終盤に差しかかると連日、新築図書館の中を訪れ、綺麗になっていく図書館に胸躍らせていた。オープン2か月前には、ほぼ書庫内が完成し、いよいよ資料の移動作業が始まった。「自分たちで、10万冊の資料を移動するんだ」と意気込んだ。

分館の書庫にある資料を、段ボールに詰める作業を開始。図書の分類順に段ボールに詰め、その順番が間違わないように段ボールに番号を

振った。約 10 万冊、段ボールには大体 30 冊から 40 冊入る。40 冊と見積もっても、2,500 箱近くの段ボールになる計算だ。職員 6 名がこの作業にあたり、1 か月で終えた。この時の書庫の状況は、「段ボールでいっぱい」「足の踏みどころもない」状態だった。2,500 箱の段ボールを新館へ運ぶ作業は、1.5 トントラックを活用した。分館から新館までの距離は学内通路を使って約 500m、トラック 1 回で運ぶことのできる段ボールの数は、だいたい 40 箱だった。つまり、すべての段ボールを運ぶには、およそ 60 回以上の往復が必要で、1 往復（積んで降ろす作業を含め）に要する時間は約 2 時間がかかる。延べ 120 時間、3 週間で終了すると見込んでいた。だが、職員の疲労は想定を上回り、すべての資料を分館から新館へ移動させるのに約 1 ヶ月かかった。

ダンボール詰め・運搬作業と並行して、新館での配架を一人ひとり担当部分を決め、段ボールから出しては配架を繰り返していた。腕が上がらなくなり、体は痛くなり、1 冊の本がとても重く感じるようになった。が、皆の努力で 3 月末には、概ね資料が段ボールから出され、書庫や



1 階 ブラウジング



1 階から 2 階への階段

開架室は空になった段ボールが山のように積み上げられていた。この間の作業は、豊田分館職員だけではなく、名古屋校舎の図書館本館からも職員が日替わりで応援に駆け付けた。短い間に 10 万冊にもおよぶ資料の移動ができたのは、その協力があったからこそである。

この蔵書移動の間に、豊田分館の新館のネーミングをどうするかで、論議がなされていた。「従来の名称である『中京大学附属図書館豊田分館』を『中京大学豊田図書館』にしたい」。それが、豊田分館側の主張だった。これには、名古屋の本館からクレームが付いたが、新豊田図書館は独立棟である、図書館業務機能も本館と同一にする。分館のイメージではない——などの理由で、「中京大学豊田図書館」に決定した。完成した新図書館の玄関には、「中京大学豊田図書館」のネームプレートが掲げられた。ちなみに、それまでの名古屋校舎の図書館の正式名称は「中京大学附属図書館本館」、豊田分館は「中京大学附属図書館豊田分館」だった。しかし、豊田校舎での新館の名称が「中京大学豊田図書館」と決まったことを機に、当時の図書委員会で改めて本館のネーミングも検討され、「中京大学名古屋図書館」と改められた。名古屋校舎図書館の玄関入口にあった「附属」のはいったネームプレートはその後、撤去され、新しい「中京大学図書館」のネームプレートが掲げられたのである。(続く)